

表着の柄に描かれた植物の種数が増えた時代と種の特徴

Period of increased number and characteristics of plant species designed on the outer garment

竹林 枝美* 鈴木 貢次郎** 濱野 周泰**

Emi TAKEBAYASHI Kojiro SUZUKI Chikayasu HAMANO

Abstract: The species of plants painted on the outer garment as designs have been reflected the backgrounds such as the society, culture, or people's interest. We studied species of plant pictures on the outer garments in different periods. At first they were found from Heian period. The total number of plants increased from Azuchi-momoyama period, especially in late Edo period. The plants with the largest number were *Chrysanthemum*, following *Pinus*, *Prunus mume*, *Prunus sp.* (Cherry blossoms), *Phyllostachys sp.*, *Acer*, and *Paeonia suffruticosa*. The number of plants were little in Heian period, as *Phyllostachys sp.* and *Paulownia tomentosa*. In Kamakura period, the *Chrysanthemum*, *Prunus sp.*, *Salix babylonica*, *Dianthus superbus var. longicalycinus* and *Patrinia scabiosaefolia* appeared for first time. In Muromachi periods, *Acer*, *Paeonia suffruticosa*, *Lespedeza sp.*, *Camellia japonica*, *Taraxacum platycarum*, *Viola mandshurica*, *Equisetum arvense var. arvense*, *Eupatorium fortunei*, and *Gentiana scabra var. buergeri* were begun to use. In general the species of plants used as designs tended to change at each periods. Especially, *Camellia japonica* much increased number of species in Azuchi-momoyama period, but decreased the number from Edo period. We discussed the reason of the fact from the viewpoint of social background or other's reasons.

Keywords: outer garment, plant, culture, Azuchi-Momoyama period, Edo period

キーワード：表着，植物，文化，安土桃山時代，江戸時代

1. 研究目的

日本の文様には、自然を題材としたものが多くあり、その中でも多く取り上げられているものに植物がある¹⁾。それらの文様は、調度品や着物など身の回りのものに模様として描かれ、着物（以下「和服」）に描かれた模様（以下「柄」）は、時と場所、場合に応じて着用する和服を選択する要素にもなっている。また和服の柄は時代背景を反映するものとして知られている²⁾。

和服には、桐竹鳳凰紋、吉祥模様の他、虎・鷹・鴛鴦などの動物や蝶などの昆虫、扇子や桶などの日常用品や、人々の生活を描写したものなど、生活に密接した柄をみることができる。自然をモチーフにした柄の事例として三保の松原や近江八景、富士を望む景観や隅田川の風景など、有名な景勝地を表現したものや人々の生活圏に近い海岸・野原・河川・庭などの空間の柄もある。同じ空間の柄であっても、例えば海をモチーフにした場合、その荒々しさを表したり、風の静けさを表したり様々である。川を描いた柄であれば滝の荘厳さを表したり静かな流れを表したりし、その自然の中の多様な表情をとらえている。このような自然の柄に、春の咲き乱れる花々や木々の紅葉、降り積もる雪などの季節感を加え、細かく表現しているものも少なくない。そのような和服の柄から、いかに日本人が自然を鋭く観察し、季節ごとの美しさを繊細に感じ取り、大切にしてきたかを窺い知ることができる。

和服に描かれる植物の柄は、意匠としてだけでなく、各時代の和服の作り手や、着る人々の植物に対する意識や嗜好、自然への興味、そこに至る社会状況を表しているのではないかと思われる。そこで、本研究では各時代の和服の柄にはいかなる植物が描かれているのかを調べ、植物の種数が増えた時代と各時代にみられる植物の種の特徴、及びそれらに影響を及ぼしていると推測される時代背景の一端を考察した。

2. 研究方法

(1) 調査対象

和服の裏（かさね）衣装や下着（ここでは肌襦袢・長襦袢や上着の下に着る衣服を表す）に柄が描かれていることは少ない。そこで、日常生活（冠婚葬祭を含む）で着装したもので、現存する資料を十分に蒐集できる女性の表着（うわぎ、和服として着た際に、一番上に着る衣）を調査対象とした。ただし、「平安から室町にかかる時代の染織品は、現在残っている作品がきわめて少なく」³⁾、裳の柄の植物について調べた。なお子供用の表着・腰巻・能衣装の唐織は、調査対象から除いた。

(2) 調査方法

本研究では、博物館が収蔵し、時代特定がなされている文献^{2,4)}、または復元資料⁵⁾や服飾・染織研究書籍⁶⁻²⁰⁾、インターネットホームページ²¹⁾及び商業用パンフレット²²⁾から、表着そのもの、または小袖であったものを袖屏風・小袖裂にした写真から探り、植物名を牧野新日本植物図鑑²³⁾から調べた。それぞれの資料に植物名が明記されている場合は、それを引用した。漢字で表記されている植物名は、片仮名に直した。植物名が明記されておらず、写真などで示されている場合は同定した。各植物の古い時代での使われ方や、外来種か否かの判断は、特記しない限り、牧野新日本植物図鑑を参考とした。

調査対象とした年代は、表着の着装が明確になった平安時代から現代（平成）までとし、植物名の数を平安、鎌倉、室町、安土桃山、江戸、明治、大正、昭和、平成の各時代に分けて集計した。ただし、一部、室町時代と安土桃山時代について、その時代の特定ができなかったものはあわせてみた。江戸時代については、前期（江戸幕府発足から17世紀中頃）・中期（17世紀中頃から18世紀中頃）・後期（18世紀中頃から大政奉還）に特定できない場合と、前期、中期、後期の3期に分けた。大正時代については一部で昭和初期までの柄の数も含めた。昭和時代については、わかるものについては1945年までの昭和初期の数も示した。

* 川崎市麻生区役所臨時的任用職員

** 東京農業大学地域環境科学部造園科学科

表-1 表着にみられた植物(シダ植物門, 裸子植物門, 被子植物門単子葉植物綱)

科名	和名	形態 *	生態 **	引用文献(番号)
シダ植物門				
トクサ科	スギナ(ツクシ)	F		4,9,10,20
	トクサ	F		4,10,18
コバノイシカゲマ科	ウラボシ	F		11
	ゼンマイ	F		15
ウラボシ科	シノブ(シノブグサ)	F		6,10,14
裸子植物門				
ソテツ科	ソテツ	W		4
イチヨウ科	イチヨウ	W	t	4,6,10,13,19
マツ科	マツ	W		2,4,5,6,7,9,10,12,13,14,16,17,18,19,20,22
	カラマツ	W		4,14
スギ科	スギ	W	t	2,14,18
被子植物門, 単子葉植物綱				
オモダカ科	オモダカ	H	a	4,9,10,17,18
ユリ科	不明種(ユリ科)	H		14
	ユリ	H		2,6,9,14,18,19,20,22
	スズラン	H		12,20
	オモト	H		4,6,10,14
	チューリップ	H		6,14,20
	ヒヤシンス	H		20
ヒガンバナ科	スイセン	H		2,4,5,7,10,14,18,19,20
	タマズダレ	H		20
	クンシラン	H		20
ミズアオイ科	ミズアオイ	H	a	2,4,5,9,10,13,14,17,18
アヤメ科	カキツバタ(ハナショウブを含む)	H	a	2,4,6,7,9,10,13,18,19,20,22
	アヤメ	H	a	5,9,10,14,17,19,20
	クロッカス	H		20
	ドイツアイリス	H	a	14
	ヒオオギズイセン	H	a	4
	ヒメヒオオギズイセン	H	a	22
	フリージア	H		20
イネ科 ***	ススキ	H		2,4,5,6,7,9,10,12,13,14,16,17,18,19,20
	アシ	H	a	2,4,9,14,18,20,22
	イネ	H		6,7,19
	ササ	B		2,4,5,6,7,9,10,13,14,17,18,19,20,22
	タケ(葉のみやタケノコを含む)	B		2,4,5,6,7,9,10,12,13,14,15,16,17,18,19,20,22
	シバ	H		10
ヤシ科	シュロ	P		19
サトイモ科	スパティフィラム	H		22
ラン科	カトレア	H		20
	ラン類	H		2,10,11,13,14,18,20,22

* 草本(H), シダ植物(F), 木本(W), ツル植物(V), タケ・ササ(B), ヤシ(P), ** a:水生植物, s:低木, t:高木, ***イネ科に不明種有り.

全植物の系統分類群別の数を集計し, 表着の柄に描かれた植物の種数の増えた時代の背景を考察すると共に, 植物の柄が描かれていた表着の数を 50 着以上, 50 ~ 10 着, 10 ~ 2 着に分けて, それぞれ前述の時代別に数を示した。結果から表着の柄に描かれた植物の種を, 数の多い順, 及び初めてみられた時代順に分け, 植物の種の特徴について, 既往の文献をもとに考察した。

3. 結果

(1) 植物の総数とその種, 種数が増えた時代

表-1, 2に示すように, シダ植物門5種, 裸子植物門5種, 被子植物門単子葉植物綱28種, 及び双子葉植物綱67種(内, ツル植物と種不明の水草)の柄を表着にみた。そのうち単子葉植

表-2 表着にみられた植物(被子植物門双子葉植物綱)

科	和名	形態 *	生態 **	引用文献(番号)
双子葉植物綱, 離弁花亜綱				
ヤナギ科	シダレヤナギ	W	t, a	2,4,5,6,7,9,10,13,17,18,19,20
ブナ科	クヌギ	W	t	10
	クリ	W	t	6,19
クワ科	カジノキ	W	t	5,20
ウマノスズクサ科	アオイ	H		6,9,10
	フタバアオイ	H		14
ヒユ科	ケイトウ(ハゲイトウ)	H		9,10
ツルナ科	マツバギク	H		20
ナデシコ科	ナデシコ	H		2,4,5,6,9,13,14,16,18,19,20,22
モクレン科	モクレン	W		16
スイレン科	コウホネ	H	a	18
ハス科	ハス	H	a	9,17
キンポウゲ科	シャクヤク	H		20,22
	ボタン	H		2,4,5,6,7,9,10,11,13,14,17,18,19,20,22
	トリカブト	H		18
	フクジュソウ	H		14
	テッセン	V		2,9,10,14,17,18,19,20
	カザグルマ	V		18
メギ科	ナンテン(花柄も有り)	W	s	4,6,7,12,14,19
ケシ科	ケシ(アザミゲシ)	H		10,14,20
ユキノシタ科	アジサイ	W	s	2,5,6,9,10,17,18
	ウツギ	W	s	10,18,22
バラ科	ウメ(青実, 捻子梅を含む)	W	t	2,4,5,6,7,9,10,11,12,13,14,16,17,18,19,20,22
	シダレザクラ	W	t	2,4,5,6,9,14,16,19,22
	サクラ	W	t	2,4,5,6,7,9,10,13,14,15,16,17,18,19,20,22
	ヤエザクラ	W		5,20
	ヤマブキ(八重咲を含む)	W		2,6,10,18
	バラ	V		11,14,18,20,22
	ハナカイドウ(カイドウ)	W	s	2,19
マメ科	ネムノキ	W	t	6
	フジ	V		2,4,5,6,7,9,10,13,14,17,18,19,20,22
	ハギ	W	s	2,4,5,6,7,9,10,13,14,16,17,18,19,20,22
	レンゲソウ	H		2,18,19,20
	クズ	V		2,4,6,13,14,18,19,20
カタバミ科	カタバミ	H		6
ミカン科	たちバナ	W	t	2,4,6,7,9,10,11,13,14,17,18,19,20,22
カエデ科	カエデ(モミジ)	W	t	2,4,5,6,7,9,10,11,13,14,16,17,18,19,20,22
ブドウ科	ブドウ	V		4,9,11,19
	ツタ(ナツツタ)	V		19
アオイ科	フヨウ	W	s	2,18,19,20
ツバキ科	ツバキ	W	t	2,4,5,6,7,9,10,13,14,17,18,19,20,22
スマレ科	スマレ	H		2,5,9,10,13,17,18,19,20
トケイソウ科	トケイソウ	V		4,18
シュウカイドウ科	シュウカイドウ	H		18
ウコギ科	ヤツデ	W		9
セリ科	セリ	H		6
双子葉植物綱, 合弁花亜綱				
ツツジ科	ツツジ	W	s	6,10,14,18,20
	シャクナゲ	W	s	20
ヤブコウジ科	ヤブコウジ	W		2,14,20
サクラソウ科	シクラメン	H		20
リンドウ科	リンドウ	H		2,13,18,20,22
ヒルガオ科	アサガオ	V		4,6,14,18
クマツヅラ科	トウギリ	W	s	4
ゴマノハグサ科	キリ	W	t	2,4,5,6,9,10,11,13,14,17,18,19,22
オミナエシ科	オミナエシ	H		2,4,5,6,9,10,13,16,17,18,20,22
ウリ科	ユウガオ	V		9
キキョウ科	キキョウ	H		2,4,5,6,7,9,10,13,14,16,17,18,19,20,22
キク科	フジバカマ	H		2,4,10,13,14
	ダリア	H		20,22
	コスモス	H		14
	キク(光琳菊, シオンを含む)	H		2,4,5,6,7,8,9,10,11,13,14,16,17,18,19,20,22
	フキ	H		4,10
	ツワブキ	H		14,20
	アザミ(ノアザミ)	H		2,4,5,10,14,18
	タンポポ	H		2,4,5,9,10,13,14,17,18,19,20
不明種	ツル植物	V		4
	水草	H	a	10

* H:草本, W:木本, V:ツル植物, ** a:水生植物, s:低木, t:高木.

表-3 表着に極めて多く表現されている植物 (50 着以上) .

時代	794		1185		1338		1573		1603		1700		1800		1867		1912		(-1945) 1926		1989		計	
	平安	鎌倉	室町	A)	安土桃山	江戸 B)	江戸時代前期	江戸時代中期	江戸時代後期	明治	大正 C)	昭和初期	昭和	平成										
キク D)		1				26		16		54		58		48		34		17		7		19	22	302
マツ						12		28		36		48		56		39		18		3			6	234
ウメ E)						9		28		20		54		47		36		10		6		12	19	234
サクラ			9	1		15		16		20		35		33				6				4	28	165
シダレザクラ						4		2		2		4		2		3		1			1			(19)
ヤエザクラ														1		1								(2)
タケ F)	1		2	1		8		16		16		23		32		22		7		2		6	6	142
カエデ(モミジ)			1					17		3		36		18		11		8				4	10	114
ボタン			1	1	1			10		3		6		24		15		9		6		9	19	98
ハギ			2		5			5		0		17		26		6		4		2		4	2	81
フジ								14		10		9		20		2		3					5	72
キリ	1		2			21		4		16		8		9				2			2	2	2	67
ササ						7		1		1		3		11		18		10		4		4	1	57
キキョウ								3		3		12		15		7		9		1		2	2	53

表内の数値は着数。黒:10着;灰:5着;点:1着。平安時代については、裳の柄の植物。A)室町・安土桃山時代(1333~1602年)、B)前・中・後期が特定できない江戸時代、C)大正~昭和初期(1914-1945)を含む、D)光琳菊、シオンを含む、E)青実、捻子梅を含む、F)葉のみや、タケノコを含む。

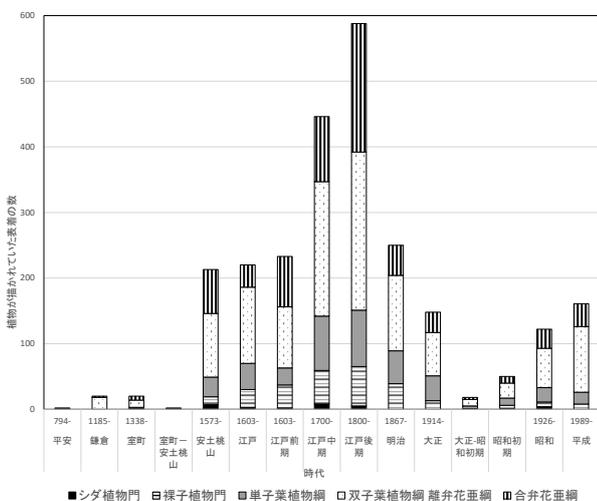


図-1 各時代の表着に描かれた植物の柄の数 .

物綱では 25 種が草本、タケ・ササ類が 2 種、ヤシ類が 1 種、双子葉植物綱では、木本が 26 種、草本が 29 種 (水草 1 種不明)、ツル植物が 10 種 (1 種不明有り) であった。また単子葉植物のオモダカ (写真-1)、ミズアオイ、カキツバタ、アシ等を始めとして、水生植物が多かった (単子葉植物のうち水生植物は 28%)。双子葉植物の多くは、花もの (主に花を觀賞対象とする) であったが、葉、樹形、果実、種子を觀賞するシダレヤナギやクスギ、クリなどもみられた。双子葉植物のテッセン、カザグルマ、バラ、フジ、クズ、ブドウ、トケイソウ、アサガオ、ユウガオ等のツル植物も多かった (表-2)。

1 着でみられた植物を除き、50 着以上でみられた植物 (表-3)、50 ~ 10 着でみられた植物 (表-4)、10 ~ 2 着でみられた植物 (表-5) に分けたところ、キク、マツ、ウメ、サクラ (シダレザクラ、ヤエザクラ)、タケ、カエデ、ボタン、ハギ、フジ、キリ、ササ、キキョウは特に柄に用いられることが多い種となり、続いて、タチバナ、シダレヤナギ、ツバキ、ナデシコ、カキツバタがあげられた。なおシダレザクラとヤエザクラはそれぞれ着数が少なかったが、サクラに含まれることもあるため、サクラの下行に示している (表-3)。

図-1に示すように、表着の柄に描かれた種は、平安時代に 2 着みられ、安土桃山時代と江戸時代中期に急激に増えた。特に江戸時代後期に多かった。そのうち、大正~昭和初期、または昭和初期の数が一時的に少なくなっていた。平安時代の表着の柄の種は、タケとキリのみであった (表-3~5)。鎌倉時代と、明

治~昭和初期、平成時代にシダ植物門の種がみられなかった他は、各時代にそれぞれの分類群の植物がみられた。

(2) 表着の柄に描かれた各時代の植物の種

表着の柄に用いられた植物の数の多い順、及び植物が初めてみられた時代順に分けると、表-6に示すように、計 13 タイプに分けられた。

50 着以上でみられた植物では (表-3)、①平安時代よりみられたタケ、キリ、②鎌倉時代よりみられたキク、サクラ (但しキクは室町時代にはみられなかった)、③室町時代よりみられたカエデ、ボタン、ハギ、④安土桃山時代よりみられたマツ (写真-2)、ウメ、フジ、ササ、キキョウ、の 4 タイプに分けられた。これらの多くは、江戸時代中期、または後期に多くなっていたが、キリは安土桃山時代に多く、ハギ、フジ、キリ、キキョウは明治時代になると少なくなった。

10 ~ 50 着の表着の柄にみられた植物は (表-4)、⑤鎌倉時代よりみられたシダレヤナギ、ナデシコ、オミナエシ、⑥室町時代よりみられたツバキ、タンポポ、スマレ、スギナ、フジバカマ、⑦安土桃山時代よりみられたタチバナ、カキツバタ、ススキ、アシ等の多くの種、⑧江戸時代後期よりみられたバラ、及び江戸時代前・中・後期よりみられたスイセン、テッセン、アザミ、ラン類の、4 タイプに分けられた。なお、ツバキは安土桃山時代に最も多かった。シダレヤナギは江戸時代中期、カキツバタ、クズは江戸時代後期に最も多かった。

2 ~ 10 着の表着にみられた植物の柄は (表-5)、⑨室町時代よりみられたリンドウ、⑩安土桃山時代よりみられたアヤメ、アオイ、ハス、⑪江戸時代 (前期、中期、後期) よりみられた多くの種、⑫明治時代よりみられたハナカイドウ、⑬大正時代よりみられたダリア、シャクヤク、チューリップ、スズラン等の外来種、及びツワブキの、5 タイプに分けられた。

4. 考察

(1) 表着の柄に描かれた植物の種数が増えた時代

表着の柄として描かれる植物は、平安時代からみられ、安土桃山時代と江戸時代中期に急激に増えた。さらに江戸時代後期にも多く見られた。「小袖の起源は、平安時代にまでさかのぼるが、小袖が広く普及するのは室町時代から桃山時代にかけてであり」といわれている²⁴⁾。また「もと內衣だった小袖が表着となるのは、応仁の乱後から」といわれている²⁵⁾。一方、中尾²⁶⁾は「室町時代から、日本という第二次センターの花弁園芸文化がはじまりをつける」と述べている。また安土桃山文化の特徴には「花鳥・動物・人物・風景、・・・が画材に好まれ」²⁷⁾という。すなわち室町時代の応仁の乱 (1477 年) 後から安土桃山時代 (1573-1603 年)

表-4 表着に表現されている頻度の高い植物(10~50着).

時代	1185		1573	1603	1700	1800	1867	1912	(1945)		1989	計		
	鎌倉	室町							昭和初期	昭和				
タチバナ			3	2	5	8	9	6	2	2	5	5	47	
シダレヤナギ a	2	1		9	2		14	9	2	3		2	44	
ツバキ		4	11	3	2	2		4	3	1	3	3	7	43
ナデシコ	1		3	5	7	2		3	4	3	2	5	3	38
カキツバタ a,E)			2	5		7		13	3	3		2	2	37
タンポポ		1		9	6		5		9	2	2		1	35
ススキ			6	1	6	8		9	3	1		1		35
アシ a			3	6		7	1		6	2			1	26
バラ							2	1		4	3	6	9	25
スマレ	1		9	4		1		3	2	2		1		23
スイセン				4	1	1		5	3	5	2	2		23
クズ			1	2		1		11	4	3				22
スギナ C)	1		6	2	1	5		3				1		19
ユリ			2	1			1			4	2	3	6	19
ミズアオイ a			1	1	2		9	3		1				17
オミナエシ	1	1	1	2	1	1		5	1			1	1	15
ブドウ			2		2	4		3	1	1		1		14
テッセン				1	4	3		4	1			1		14
アジサイ			5	2	3			2						12
アザミ D)				1		6		3			1	1		12
ラン類				1		5		1		3		1	1	12
フジバカマ	1	1		1		1		5			1	1		11

表内の数値は着数。黒:10着;灰:5着;点:1着。A)前・中・後期が特定できない江戸時代。B)大正~昭和初期(1914-1945)を含む。C)ツクシを含む。D)ノアザミを含む。E)ハナショウブを含む。a:水生植物。

にかけての、小袖が表着となった時代と花卉園芸文化が始まり、画材に好まれた時代と重なることが、表着の柄に描かれた植物が増えたことに関わると考えられる。

江戸時代中期は元禄文化、後期は化政文化が栄えたといわれている。元禄文化には、「小袖・振袖の発達とそれともなう模様・色調の絢爛化・・・などが注目される」²⁷⁾という。化政文化の背景には「とくに庶民文化の発展にはめざましいものがある」²⁷⁾、「庶民のあだいにも茶湯・生花・音曲などの遊芸に手を染める人々が多くなった」²⁷⁾ことがあるという。また、中尾²⁸⁾は「江戸時代の園芸文化はアジアの花卉園芸文化の第二次センターとして、日本の特色を発揮して、大発展をした」と述べている。すなわち花卉園芸文化が、江戸時代中期から後期に、將軍や諸大名から庶民へと普及すると共に、茶湯・生花・音曲などで着る機会が増え、模様、色調の絢爛化した小袖、振袖の発達と共に、表着に多くの植物の柄が用いられたと考えられる。

(2) 表着の柄に描かれた各時代の植物の種の特徴

各時代でみられた植物の特徴を、表-6に示すように表着に多く描かれた植物の種数の多い順、及び柄として植物が初めてみられた時代順にみる。なお関連する種の説明をした際、重複を避けるため、その種に関する再考察は行っていない。

50着以上で、①平安時代よりみられたキリは、「瑞祥の花である。それは桐に鳳凰が住むという説(元来はアヲギリなのである)」がある²⁸⁾。あわせてタケについては、「竹の実のみを食物とし」²⁹⁾たという中国の伝説がある(桐竹鳳凰紋様)。キリとタケが深く関

わって、これら両種の植物が、表着の柄に多く描かれたと考えられる。50着以上で、②鎌倉時代よりみられたキクは、表着に描かれた総数として最も多かった。これは、「重陽の日に、清涼殿の前に一對の菊花壇をつくり、文武百官がその花を賞し、詩を詠み、終わって菊酒を飲む」²⁶⁾、すなわち「平安朝の頃には宮中で『菊合合せ』の公事が行われた」²⁶⁾ことが、長く引き継がれてきたためと考えられる。特に「キクは上流階級で重要度が上がり、鎌倉時代になると後鳥羽上皇がキクを好んで、その紋様を衣服などにつけ、皇室の菊紋章の起源となった」²⁶⁾ことは鎌倉時代から表着にキクの柄がみられたことに関わると考えられる。その後、江戸時代の「花卉園芸文化は將軍から諸大名に伝わり、・・・中流社会へと普及していった」²⁶⁾ように、宮廷から庶民に、祭事と同時に栽培の大衆化もおきていたと考えられる。サクラも次いで多くみられた。「万葉集や古歌、文書に出てくるのは、(この)ヤマザクラかその変種である」²⁶⁾。それに対して「平安末期から鎌倉時代にかけて八重のサクラが都のあちこちで見られるようになったらしい。兼好法師(1283~1362)は、「徒然草」のなかで『八重桜は奈良の都にのみありけるをこのごろぞ世に多くなり侍るなり』と記している」という³⁰⁾。鎌倉時代になり品種群の「サトザクラ」がその原種であるオオシマザクラの生育地と鎌倉幕府の関わりによって生まれたと考えられ²⁶⁾、サクラが多く注目され、柄に描かれるようになったと考える。

50着以上で、③室町時代よりみられたカエデ、ボタン、ハギのうち、総数でカエデは6番目、ボタンは7番目に多く見られた。

表-5 表着の柄に表現された植物 (2~10着).

時代	1338		1603		1700	1800	1867	1912		1926		1989	計
	室町	安土桃山	江戸 A)	B)				江戸中期	江戸後期	大正 C)	D)		
アヤメ a		1		1	3	1		2		1			9
レンゲソウ			2		1		3	1		1			8
フヨウ			1		1		3		3				8
ツツジ					1		5			1			8
ダリア h								1				7	8
カラマツ					3	2				1	1		7
リンドウ	1	2				1		1				1	6
スギ			2		2					1	1		6
ナンテン E)			1		2	1		2					6
オモダカ a					6								6
シャクヤク p								1		1		4	6
アオイ		3			1			1					5
ヤマブキ F)			1		1		3						5
イチヨウ					2	2		1					5
オモト					1	1		1		1	1		5
シノブ(シノブグサ)			1			2				1	1		5
トクサ a				1	3								4
ウツギ							3					1	4
アサガオ						2		1		1			4
ヤブコウジ			1					2	1				4
チューリップ h								3		1			4
ケイトウ(ハゲイトウ) h				1		2		1					4
ケシ(アザミゲシ) h						1			3				4
ハス a		3											3
イネ			1			1		1					3
水草 G) a					3								3
ハナカイドウ(カイドウ) p								2				1	3
クリ			1					1					2
ユウガオ				1	1								2
フキ					2								2
トケイソウ					1	1							2
カシノキ					1			1					2
スズラン h*									2				2
ツバキ								2					2

表内の数値は着数。黒:10着;灰:5着;点:1着。A)前・中・後期が特定できない江戸時代。B)江戸時代前期。C)大正~昭和初期(1914-1945)を含む。D)昭和初期(1926-1945)。E)花柄も有り。F)八重咲を含む。G)種不明。a:水生植物。p:園芸植物の可能性。h:園芸植物。

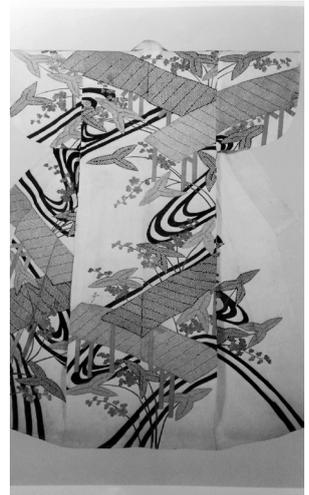


写真-1 表着の柄の例 (オモダカ), 河上・長崎⁹⁾より



写真-2 表着の柄の例 (マツ) 山辺¹⁰⁾より

カエデは江戸時代中期に最も多く、ボタンは江戸時代後期に最も多かった。有瀧³¹⁾によれば「カエデは元禄時代(1688~1704)に全盛をきわめた」という。上原³²⁾は、「牡丹を・・・多くの品種を作り出し鑑賞したのは江戸時代であって(以下略)」と述べている。表着の数と、カエデ及びボタンの流行時代とが同傾向を示したと考えられる。またハギは、8番目に多く見られた種である。これは、9番目にみられ、後述の④安土桃山時代よりみられたキキョウ、10~50着でみられ、⑤鎌倉時代よりみられたナデシコ、オミナエシ、及び⑥室町時代よりみられたフジバカマ、⑦安土桃山時代よりみられたススキ、クズとあわせて、秋の七草である。これらの柄がみられる各時代に、万葉集に詠まれている秋の七草として認知されていたか否かは判断できないが、比較的多く見られたことは確認できた。春の七草については、セリが1着のみであったことから、現代にもつながる「秋の七草」が鑑賞植物としてあったと考えられる。

50着以上で、④安土桃山時代よりみられたマツ(写真-2)、ウメは、前述のタケとあわせて吉祥模様の「松竹梅」の影響と考えられる。ササは、その葉の同形質性からタケの一種の吉祥模様として捉えられ、表着に多く描かれたものと考えられる。フジは

ツル植物であるが、10~50着にみられたクズ、ブドウ、バラ、テッセン、2~10着でみられたアサガオ、ユウガオ、トケイソウ、1着でみられたカザグルマ(表-2)等、フジ以外のツル植物も多くみられた。これは後述の10~50着の⑤鎌倉時代よりみられたシダレヤナギと同様に、「蔓」という特徴的な形態に関心が高かったためと考えられる。

10~50着のうちの⑤鎌倉時代よりみられたシダレヤナギについては、中尾³³⁾は、『万葉集』にはヤナギの歌が三九種もある、「当時日本にシダレヤナギがあったことは明確である」という。古来、下垂という樹形に関心が高かったと考えられる。

10~50着のうちで、⑥室町時代よりみられたツバキは、安土桃山時代に最も多かった(表-4)。ツバキは「茶席の花として賞用されてきた」²⁶⁾という。浅井³⁴⁾は、「洛西金閣寺に今なお、老ツバキが点在することはその間の事情をしのばせるものであろう」と述べている。茶湯の文化が発展すると共に、表着の柄に用いられることも多くなったと考えられる。ただし、江戸時代以降減少した(表-4)。これは、一方で「ツバキへの不吉観はしかし、今日でも人によっては根深いものがある」³⁵⁾ことは、表着の柄に用いられることが少なくなった背景の一つと考えられる。

表-6 表着の柄に描かれはじめた時代とその種

時代	50着以上	10～50着	2～10着
平安時代	①タケ, キリ		
鎌倉時代	②キク, サクラ*	⑤シダレヤナギ a, ナデシコ, オミナエシ	
室町時代	③カエデ, ボタン, ハギ	⑥ツバキ, タンポポ, スミレ, <u>スギナ</u> , <u>フジバカマ</u>	⑨リンドウ
安土桃山時代	④マツ, ウメ, フジ V, ササ, キキョウ	⑦タチバナ, カキツバタ a, ススキ, アシ a, <u>クス V</u> , ユリ, ミズアオイ a, ブドウ V, アジサイ	⑩アヤメ a, アオイ, ハス a
江戸時代		⑧バラ V, スイセン, テッセン V, アザミ, ラン類	⑪レンゲソウ, フヨウ, ツツジ, <u>カラマツ</u> , <u>スギ</u> , ナンテン, オモダカ a, ヤマブキ, <u>イチヨウ</u> , オモト, <u>シノブ</u> , トクサ, ウツギ, アサガオ V, ヤブコウジ, ケイトウ, ケシ, <u>イネ</u> , <u>クリ</u> , ユウガオ V, <u>ズキ</u> , トケイソウ V, カジノキ, 水草 (種不明) a
明治時代			⑫ハナカイドウ
大正時代			⑬ダリア, シャクヤク, チューリップ, スズラン, ツワブキ

○番号は、初めてみられた時代別に付けたタイプ、*：シダレザクラ、ヤエザクラを除く、a：水草、V：ツル植物、下線：秋の七草、二重線：比較的、花や果実が際立たない種。

同じく⑥室町時代よりみられたタンポポやスミレ、⑦安土桃山時代よりみられたユリやアジサイ、⑧江戸時代よりみられたバラやスイセン、アザミ、ラン類、2～10着の⑩安土桃山時代でみられたリンドウ、アオイ、⑪江戸時代よりみられたレンゲソウ、フヨウ等、⑫明治時代よりみられたハナカイドウ等、多くの種は、花を鑑賞するもので、表着の柄に描かれることも多くなったことは自然と考える。一方、⑥室町時代よりみられたスギナ(ツクシ)や、2～10着の⑪江戸時代よりみられたカラマツやスギ、シノブ、トクサ、クリ、フキ等、あまり花や果実が目立たない種が比較的多く見られたことは、鑑賞対象が花や果実だけではなかったことを示している。

10～50着で⑦安土桃山時代よりみられたタチバナは、「古来洛西水無瀬宮の神木で」あった²⁸⁾。また「吉祥文様の代表的なもの一つ」³⁶⁾、「吉祥の意味を強く持っていた」³⁷⁾という。縁起がよいこと、めでたいこととして、表着の柄に多く描かれたと考えられる。また⑦安土桃山時代には、カキツバタ、アシ、ミズアオイもみられた。2～10着の⑩安土桃山時代よりみられたアヤメ、ハス、⑪江戸時代よりみられたオモダカや種不明の水草等、水生植物が比較的多くあげられた。なお水生植物であるヒオウギスイセンやコウホネ、ドイツアイリス、ヒメヒオウギスイセン(表-1,2)も、1着の表着にみられた。3着で見られたイネや44着でみられたシダレヤナギも湿地に多く育つ。これらは日本の多雨気候で水を鑑賞するという習慣に大きく関わってきたためと考えられる。

2～10着の⑬大正時代よりみられた種としてダリア、チューリップなどがあげられた。これらは、開国後、外来種として庶民に広まり、表着に描かれはじめたと考えられる。

5. まとめ

表着の植物の柄は、平安時代からみられ、安土桃山時代に増え、江戸時代中・後期に特に多く見られた。極めて多く見られた植物は、キクであり、マツ、ウメ、サクラ、タケ、カエデ、ボタン、ハギ、フジ、キリ、ササ、キキョウと続いた。平安時代のキリとタケ等の瑞祥の柄や、吉祥模様の「松竹梅」の種が多かった。また秋の七草が多く描かれていたこと、ツル植物や水生植物が多く描かれたことや、花を觀賞対象としない植物でも比較的多くみられたこと等の特徴をみた。その他、カエデやボタンの柄とその流行時期との関連なども見た。

引用文献

- 1) 花林社 (1996):日本の文様図典:紫紅者, 264pp
- 2) 京都国立博物館 (1987):日本の染織一技と美一:京都書院, 303pp
- 3) 長崎巖 (1998):染と織を訪ねる:新潮社, p.172-173
- 4) 国立歴史民俗博物館 (1990):野村コレクション 小袖屏風:朝日新聞社, 214pp
- 5) 切畑健・市田ひろみ (1985):京都染織まつり記念図録 写真でみ

る日本の女性風俗史:京都書院, 156pp

- 6) 濱田信義 企画・編集 (2013):日本の文様:パイ インターナショナル, 195pp
- 7) 長寿を祝う会編 (1985):山邊知行コレクション IV 日本の染織 (1):源流社, p.79-156
- 8) 長寿を祝う会編 (1985):山邊知行コレクション V 日本の染織 (2):源流社, p.9
- 9) 河上繁樹・長崎巖編 (1987):鐘紡コレクション1 小袖一:毎日新聞社, 187pp
- 10) 切畑健・丸山信彦編 (1988):鐘紡コレクション2 小袖二:毎日新聞社, 193pp
- 11) 小泉和子 (2006):昭和のキモノ:河出書房新社, p.48-66
- 12) 近藤富枝 (1980):大正のきもの:民族衣裳文化普及協会, p.66,69,172
- 13) 長崎巖 (1993):日本の染織4 小袖:京都書院, 95pp
- 14) 長崎巖 (2008):きもの 和のデザインと心:東京美術, 198pp
- 15) 白洲正子 (2000):衣匠美, 世界文化社, p.108,109
- 16) 鈴木健二 (1980):原色現代日本の美術 14:小学館, p.15-23,163
- 17) 山辺知行監修 (1983):日本の染織 第五巻 小袖 I:中央公論社, 125pp
- 18) 山辺知行監修 (1983):日本の染織 第六巻 小袖 II:中央公論社, 125pp
- 19) 山辺知行監修 (1983):日本の染織 第十巻 近代の染織:中央公論社, 116pp
- 20) 弓岡勝美 (2007):時代 きもの:グラフィック社, 128pp
- 21) 公益社団法人京都染織文化協会:染織祭衣装 染織祭の歴史:京都染織文化協会ホームページ <<http://www.fashion-kyoto.or.jp/orikeyo/maturi/index00.htm>>, 2015.8.18 更新, 2015.9.12 参照
- 22) きものやまと (2014):2017 YAMATO Furisode Collection:きものやまと, p.1-28
- 23) 牧野富太郎 (1962):牧野新日本植物図鑑:北隆館, 1060+77pp
- 24) 河上繁樹・藤井健三 (1999):織りと染めの歴史 日本編:昭和堂, p.81
- 25) 高田俊男 (1986):きもの文化史:朝日新聞社, p.39-57
- 26) 中尾佐助 (1989):花と木の文化史第7刷:岩波書店, 216pp
- 27) 京大日本史辞典編纂会編 (1990):新編日本史辞典:東京創元社, p.175-176, p.322-323
- 28) 上原敬二 (1996b):樹木大図説 III 第11刷:有明書房, p.872
- 29) 似内恵子 (2013):着物の文様とその見方, 誠文堂新光社, p.11,221,299
- 30) サクラの品種に関する調査研究報告書編集委員会 (2004):日本のサクラの種・品種マニュアル:財団法人日本花の会, p.49-56
- 31) 有瀧龍雄 (1968):モミジ栽培の歴史 (大井次三郎, 有瀧龍尾, 中村恒雄著 モミジとカエデ), 誠文堂新光社, p.15-29
- 32) 上原敬二 (1996a) 樹木大図説 I 第12刷:有明書房, p.977
- 33) 中尾佐助 (2006):中尾佐助著作集 第I巻 農耕の起源と栽培植物第二刷:北海道大学出版会, p.496-498
- 34) 浅井敬太郎 (1969) ツバキを知る-ツバキ界への手びき(椿-花と文化-):誠文堂新光社, p.19-29
- 35) 津山尚 (1972) I. ツバキ属と人間の歴史 (日本ツバキ協会編 現代椿集), 講談社, p.233-269
- 36) 長崎巖 (2005):長崎巖監修 きもの文様図鑑:平凡社, p.11
- 37) 弓岡勝美 (2005):長崎巖監修 きもの文様図鑑:平凡社, p.221